生田遺跡第４次発掘調査概要

—中山手地区再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—

2006

神戸市教育委員会

第１章　はじめに

１．遺跡の立地状況

生田遺跡は、中央区下山手通１丁目～中山手通３丁目に所在する。遺跡の立地する三ノ宮・元町地区は、比較的早くから都市化しており、私鉄･JR などが乗り入れる阪神地域のターミナルで、商業施設や官公庁などが集中し、神戸市域はもとより阪神地域の中心地といえる場所である。

遺跡は鯉川をはじめとした六甲山系から流れ出す中小河川により、形成された狭い扇状地の扇央部分に位置する。遺跡の範囲はやや東西に長く東西約400m、南北約300mである。遺跡内は西側が高く、東側に下がる地形になっている。現況では調査地中央部が最も高く、標高17～24m、東部の生田神社付近は低くなり標高12～20mを測る。

Fig. 2　調査地周辺（トアロード界隈）

Fig. 1　調査地位置図

2．周辺の遺跡

生田遺跡は、縄文時代から中世に至る複合遺跡である。以下時代ごとに周辺の遺跡を概観する。

縄文時代の遺跡は、市内ではあまり発見されていない。中央区熊内遺跡で、早期の大川式の土器を伴う竪穴住居や、後期の福田ＫⅡ式～元住吉山Ⅰ式の土器・河道・土坑を発見した。また、中央区雲井遺跡では早期の羽島下層Ⅱ式・前期の北白川下層Ⅲ式・中期の船元式・北白川Ｃ式・わずかに後期の元住吉山Ⅱ式・晩期の突帯文土器・時期不明の土偶などを発見した。また、中央区宇治川南遺跡では、河道内から縄文時代早期～晩期の土器が出土した。また、長田区五番町遺跡でも後期前半の北白川上層式の土器がまとまって出土した。他にも垂水区垂水日向遺跡・大歳山遺跡、西区元住吉山遺跡などが挙げられる。特に元住吉山遺跡は後期後葉の標式遺跡である。

弥生時代の遺跡は、比較的多くなり、生田遺跡周辺では雲井遺跡、兵庫区楠･荒田町遺跡が挙げられる。前者では方形周溝墓、後者では貯蔵穴・方形周溝墓などが確認されている。また、熊内遺跡では、集落を取り巻く環濠と考えられる大溝が確認されている。楠・荒田町遺跡は遺物や遺構の密集度から当時の中心的な集落と考えられ、同様の遺跡は神戸市内で幾つか発見されている。

古墳時代は、市内では西求女塚古墳、五色塚古墳など比較的大規模な古墳が築かれている。周辺では大きな古墳は発見されていないが、中央区生田古墳群では古墳、熊内遺跡では木棺墓が確認されている。また、熊内遺跡、雲井遺跡では竪穴住居などが検出され、集落も点在していたことが判明している。

奈良時代以降の主な遺跡としては、奈良から平安時代は中央区日暮遺跡・同区二宮遺跡・同区下山手北遺跡、平安から鎌倉時代は兵庫区祇園遺跡、室町～戦国時代は中央区花隈城遺跡が挙げられる。近隣に遺跡が集中しており、それぞれの遺跡と強い結びつきがあったものと考えられる。

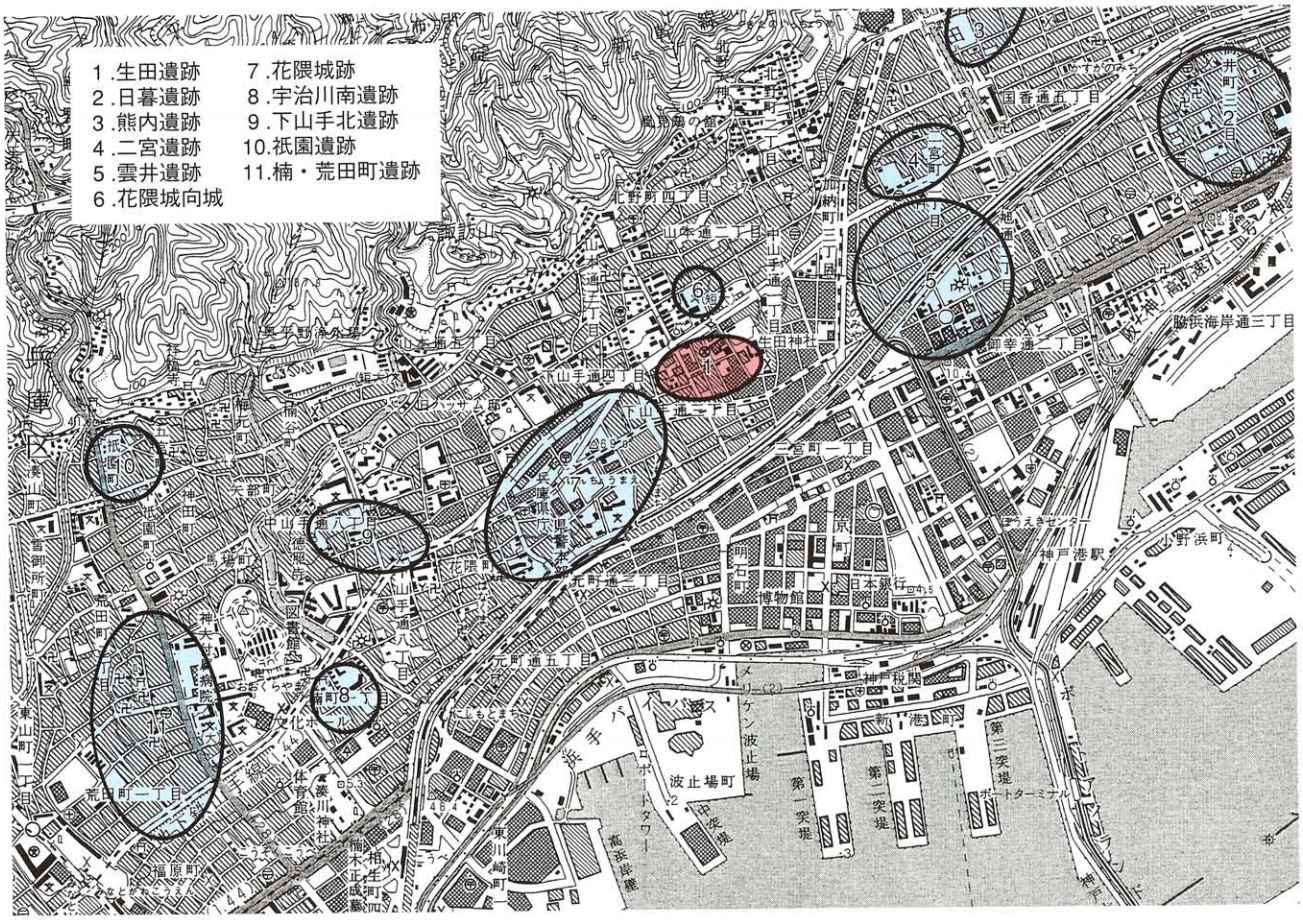


Fig. 3　周辺の遺跡

3．調査の経緯

発見の契機は昭和62年に生田神社の西側でのホテル建設の際行なった試掘調査で、古墳時代の遺物が発見され、遺跡が存在することが判明した。発掘調査により古墳時代中期～後期の掘立柱建物・竪穴住居が発見された。特に古墳時代後期の掘立柱建物は総柱のもので、倉庫群と考えられている。その後調査では中世の流路などが確認されているが、古墳時代の建物跡などは確認されなかった。

平成14年度に中山手地区の再開発事業に伴い試掘調査を行なった結果、古墳時代後期の遺物包含層が良好に存在することが判明し、遺跡がこれまで考えられていたよりも西に広がることが判明した。さらに平成17年度には再度試掘調査を行なった。その結果事業地の西側を除きほぼ全面に遺物包含層が確認され、さらに縄文時代後期の遺物が比較的まとまって出土し、縄文時代の集落の発見も予想された。

平成17年12月から建物除去が終了した箇所から順に１～６のブロックに分け調査を実施した。調査面積は当初全体で3,800㎡弱であったが、その後の設計変更などにより約4,500㎡に増加した。

現地での調査期間は、平成17年12月26日から平成18年３月31日、調査面積は総床面積約4,515㎡、総延べ面積9,215㎡であった。

平成18年２月26日には２BLにおいて現地説明会を行った。悪天候にもかかわらず参加者は157名を数えた。

現地での発掘調査終了後、出土した遺物は神戸市埋蔵文化財センターに搬入した。出土遺物は、水洗・マーキング・接合・復元などの一連の整理作業を行い、整理終了後、復元遺物の写真撮影を行った。遺物整理期間は平成18年４月３日から平成18年９月29日である。

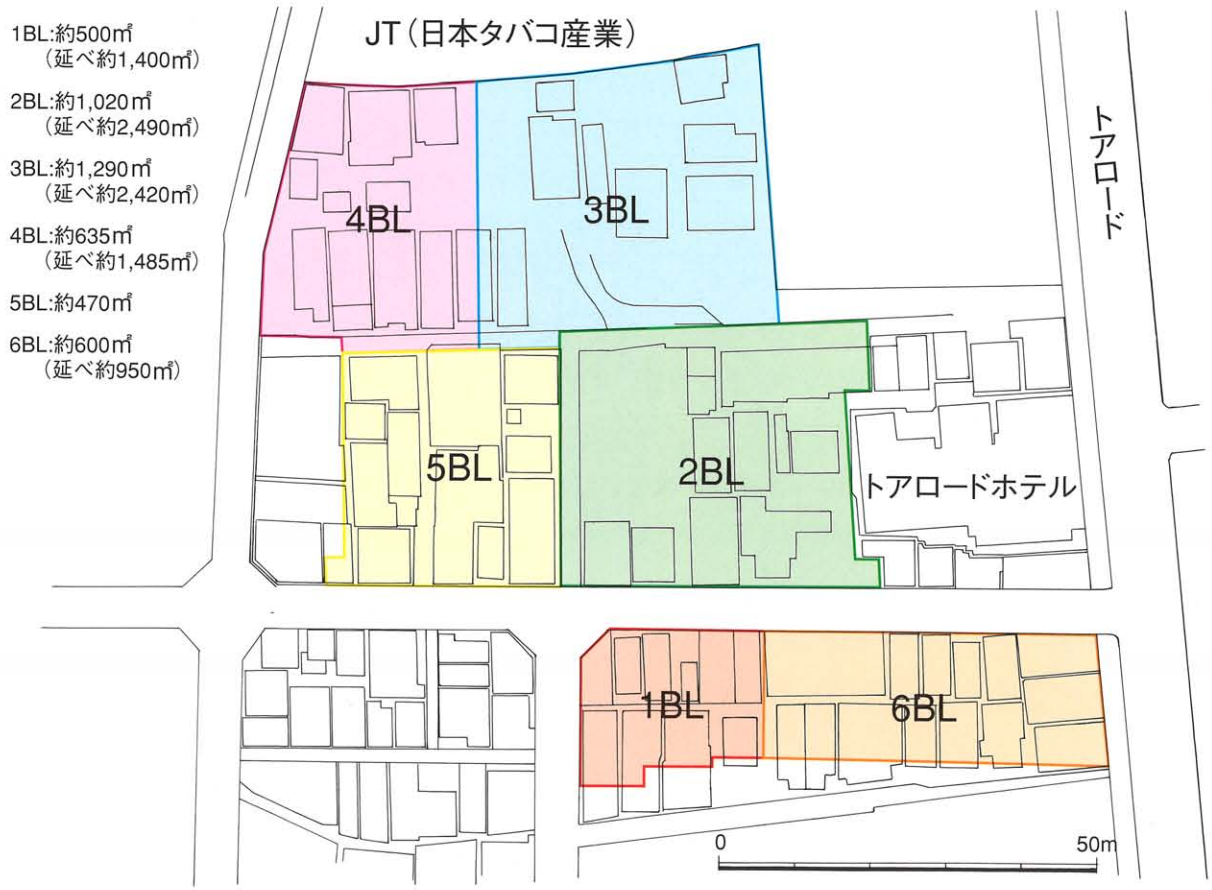


Fig. 4　調査地地区割り図

4．神戸中華同文学校

調査を進めるうち、2 BL からはレンガ積みの基礎や、トイレと考えられるコンクリート貼の施設などが検出された。戦前の地図からこの基礎が明治から昭和初期まで当地にあった神戸中華同文学校のものと考えられる。神戸中華同文学校とは、神戸の華僑の子弟のため母国の文化などを教える学校で、1900年に建設された神戸華僑同文学校を前身とする（初代校長は犬養毅）。その後、周辺にあった同様の学校と合併をし、1939年神戸中華同文学校にという名称で再編された。同学校がまとめた「神戸中華同文学校八十周年紀念刊」には校舎の配置図が1924年当時のものと戦前のものとの２面あり、今回検出された基礎がいずれのものか不明な点が多かった。そのため、2006年２月15日に神戸中華同文学校の卒業生など華僑関係者の方々に、基礎遺構の確認を願った。

Fig. 5　神戸中華同文学校基礎（北から）

改修後の学校のトイレが学校の東端にあり、南北に長い配置をしていたこと、また、校舎全体の配置などをお伺いして、この基礎が、終戦前の神戸中華同文学校のものであると判明した。また、今回神戸中華同文学校の基礎としたものの、西側にもレンガ基礎が続いた。そのため、西側にも図面に記載されていない同文学校関連の建物が存在した可能性がある。

建物に使用されていたレンガには「#」・「キ」・「×」・「◯」など数種の刻印が見られ、そのうち × 印は岸和田煉瓦株式会社、◯印は大阪窯業所のもの考えられる。煉瓦の積み方はイギリス積みを基本としているものの、各所で規格外の積み方を行なっている。なお、今回検出したレンガの一部は、再開発ビルのモニュメントとして使用される予定である。

また、3 BL からも同様の建物のレンガ基礎が検出された。ここに使用されていたレンガにも刻印が見られ、「岸和田煉瓦株式会社」の刻印である「×」・「岸 × 泉」が多い。不明な部分は多いが、神戸華僑歴史博物館　藍撲館長の御教示によると、この場所には明治時代頃の外国人向けの社交場があったそうで、この基礎はその建物の基礎であった可能性がある。

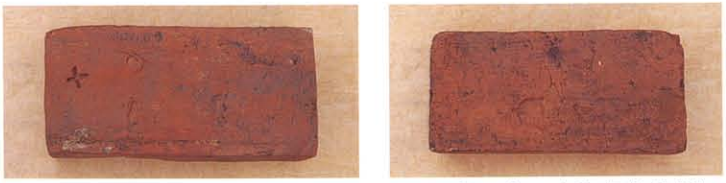


Fig. 6　刻印レンガ（左：岸和田煉瓦㈱製・右：大阪窯業社製）

Fig. 7　3 BL レンガ基礎（西から）

第２章　調査成果

１．基本層序

調査地は、先述のとおり六甲山系南麓に形成された扇状地上に立地しているため、標高差はおおよそ５ｍを測る。比較的急な斜面地である上に、さらに江戸時代頃に行なわれた大規模な雛壇状造成により、調査範囲内の各地点で様相が異なる。３・４BLでは耕作土直下に中世遺構面・古墳時代後期から平安時代遺構面・縄文時代から弥生時代遺構面の３層の遺構面を検出した。しかし２・５BLでは、明治～昭和初期の神戸中華同文学校の基礎の直下に、縄文時代後期から古墳時代遺構面を検出した。さらに下層には３層の縄文時代の遺構面が確認された。１・６BLでは削平は比較的少なく、現地表面から盛土・旧耕作土・古墳時代後期包含層（上面が中世遺構面）・古墳時代中期～後期遺物包含層（上面が古墳時代後期遺構面）・縄文時代～弥生時代遺物包含層(上面が縄文時代～弥生時代遺構面)・縄文時代後期遺物包含層(上面が縄文時代後期遺構面？)が堆積する状況を確認した。なお、現地表面から最終面までの深さは、調査地北部３・４BLでは1.0～1.5m、中央部２・５BLでは60～90㎝、南部１・６BLでは1.8～2.0mを測る。

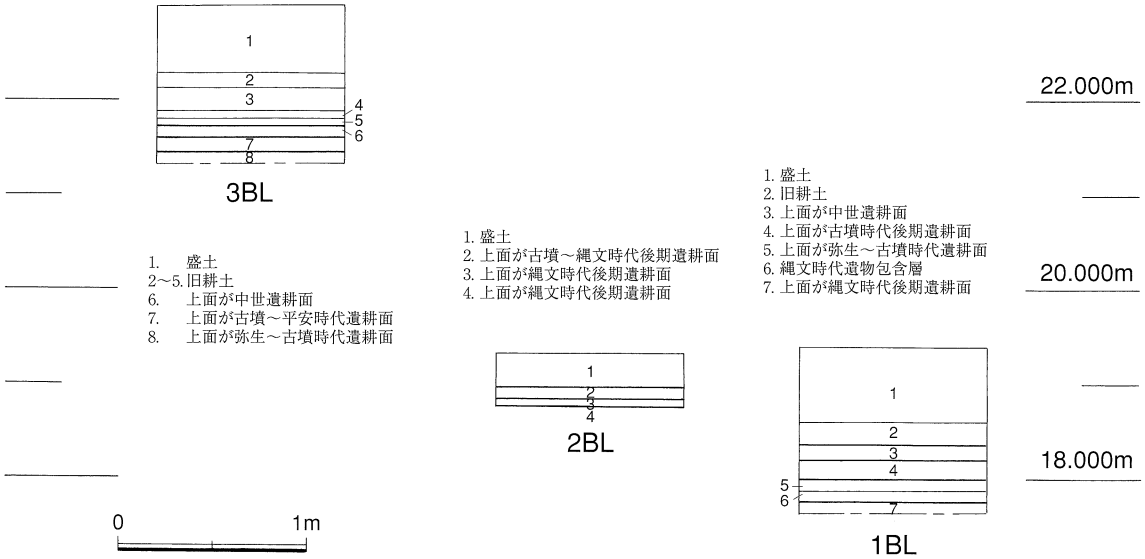


Fig. 8　調査地断面基本層序模式図

２．検出遺構

奈良時代から中世

この時期の遺構は、１BL・３BL・４BL・６BLで確認された。主な遺構は、柵列・土坑・井戸・溝・大溝・ピットが挙げられる。

掘立柱建物

４BLで検出したSB4101のみで、建物規模は２間×３間の掘立柱建物である。柱穴堀形は直径20～40㎝、深さ15～20㎝、柱間は1.5～2.5mを測る。建物の方向は、N25°Wである。柱穴からは平安時代頃の土師器が出土した。

柵列

１BLで検出したSA1101のみで、規模は南北４間である。柱穴は直径20～40㎝、深さ20～50㎝を測り、埋

4 BL　SB4101（北東から）

4 BL　平安時代～中世遺構面（北東から）

1 BL　中世遺構面（南東から）

3 BL　古墳時代～平安時代遺構面（西から）　手前に SE3201

3 BL　SE3201（南東から）

6 BL　SR6101（北西から）

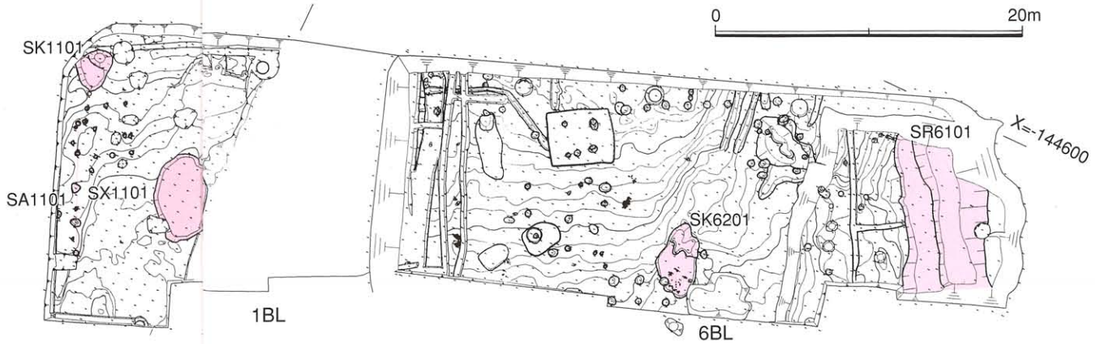


Fig. 9　平安時代から中世遺構平面図

土は灰色砂質土である。P-1・2には遺存状態は悪いが、直径10cm程度のヒノキ科・マツ属の柱材が残存していた。柱間はやや広く、約2.2mを測る。柱穴からは平安時代末から鎌倉時代の土師器・須恵器が出土した。

土坑

中世のものと、平安時代のものとが1・3・4・6BLで確認された。中世のものは1BLで検出されたSK1101と3BLで検出されたSK3101などである。前者は楕円形で、長径2.7m、短径2.0m、深さ60cm、遺構の北部では円形に下がり深さ1.0mを測る。なお、堆積状況や形状から、この部分が井戸状の遺構で、南側の部分については、井戸枠の抜き取り痕跡の可能性が高い。後者も楕円形で、長径2.9m、短径1.5m、深さ80cmを測る。底面には40～50cmほどの大きな花崗岩が2個放りこまれてあった。また、最上層には動物のもの考えられる歯が出土した。埋土はいずれも灰褐色系の土で、中世の土師器・須恵器などが出土した。

一方、平安時代のものは、主に3BLで確認されており、代表的なものはSK3205とSX3202である。前者は、北と東は調査区外へ拡がるため、正確な規模は不明であるが、現状では直径2.0m程度、深さ40cm以上の不整円形を呈する。埋土からは平安時代の須恵器・土師器が出土した。後者は、南半は削平されていたが、北半は一辺3.5mの方形の形状を呈する。深さ20cm、底面はほぼ平坦で、ピットを2基もつ。埋土からは時期を明確に示す遺物が出土しなかったが、埋土の上面から、直径90cm、深さ約40cmを測るピットが掘り込まれており、平安時代の土師器とともに木片が出土した。このことから、平安時代以前のものと考えられる。

Fig.10　SK3205出土遺物

井戸

井戸についても、土坑と同様に中世と奈良から平安時代のものが確認された。中世のものは4BLに集中しており、SE4101・4102・4103・4104がある。いずれも直径

Fig.11　SE4102（東から）

Fig.12　SE4102出土遺物

1.0m前後、深さ70cm前後を測る。SE4101は井戸の中でもっとも深く90cmを図る。素掘りの井戸で、底面に曲物を据えていた。曲物は直径30cm、高さ30cmのヒノキ製である。土器のほかに骨小片も出土した。SE4103・4104については素堀の井戸で、特に前者の底面からは、土師器皿・須恵器椀の完形品が出土した。SE4102は石組みの井戸で、石は東側部分が崩落しており、西側部分は4段程度残存していた。中層には平安時代の土師器皿、瓦器椀がほぼ完形の状態で出土した。

Fig.13　SE3201出土遺物

一方、奈良から平安時代の井戸は3BLで検出したSE3201のみで、縦板組隅柱横桟留の井戸である。上層には花崗岩が1段敷き詰められており、一部井戸内に崩落した状況が確認できた。掘形の直径2.0m、一辺70cm、深さ1.3mを測る。厚さ1.0～2.0cm程度の立板を一辺に2枚、四隅は杭で留め、中層にも杭で横桟を渡す。土圧によって立板が南東方向へ倒れる。

主に奈良から平安時代の土師器・須恵器、刳物の桶・斎串・杓文字が出土した。なお、分析の結果、板材には、モミ属・ツガ属・カヤが、杭にはコウヤマキが、横桟にはコウヤマキ・カヤ・コナラ属アカガシ亜属が使用されている。強度・耐水性を考慮した木材選択が行なわれていたことが判明した。湧水層に設置されていた曲物には、ヒノキが使用されていた。また、井戸内部から出土した製品については、杓文字・斎串がヒノキ、桶については、底がモミ属、身がケヤキ、持ち手がコナラ属アカガシ亜属と判明した。

Fig.14　SE3201桶

Fig.15　SE3201杓文字（左）・斎串（中央・右）

大溝

調査地内では幅20cm前後の小規模な溝が何条も検出されたが、6BL東端で検出したSR6101は、その中でも規模が大きい。北西方向から南東方向の溝で、検出長約10.0m、最大幅6.0m、深さは検出面から80cmを測る。遺構の平面形は直線的であるが、底面は凹凸が激しく、一定していない。上層ではオリーブ灰色粘質土、下層では灰色粗砂が堆積する。埋土からは縄文時代～中世の遺物が比較的まとまって出土した。遺物の中には中世後期と考えられる陶磁器もみられるため、埋没時期はこの時期と考えられる。中世後期にはこの付近に中世城郭である花隈城が存在していた。その絵図と現在の地図を重ね合わせて見ると、現在のトアロード付近に外堀が巡っているように描かれている。これらのことから、この溝が花隈城の堀の一部である可能性が指摘できる。

古墳時代

この時期の遺構は調査地全域で検出された。主な遺構は、掘立柱建物・竪穴住居・土坑・溝などが挙げられる。特に掘立柱建物は規格性をもって配置されたような状況で検出された。1・3BLで検出されたような溝はその形状から区画溝のようなものであった可能性が高い。遺構の時期は、大半が後期に属する。

掘立柱建物

掘立柱建物は12棟検出された、大きく分けて2BL北東・3BLの北建物群（SB3201・3202・SA3201）、1BL・6BLの南建物群（SB1201～1204・6201・6203・6204）、あとは2BL南・5BLの中央建物群（SB2201・5201）にまとめられる。

北建物群は、建物として検出されたものは2棟あり、すべて総柱のものである。3BLで検出したSB3201・3202である。SB3201は全体の規模が判明しており、3×2間の総柱建物である。柱穴は方形または隅丸方形のものが多く、柱穴掘形は直径・1辺60cm前後、深さ30～40cmを測る。柱痕跡を残すものがあり、柱の直径は20cm前後であったと考えられる。埋土は暗茶褐色・黒灰色粘質土～砂質土である。柱間は東西で約1.3m、南北で約1.6mを測る。建物の方向はN30°Wである。柱穴からは古墳時代の土師器・須恵器が出土した。SB3202についてもほぼ同様の規模であると考えられる。SA3201としたものは南側で柱穴を検出できなかったが、おそらく同様の総柱建物であった可能性が高い。また、2BL北東については、これらの建物と同規模の柱穴と考えられる遺構が数基確認された。そのため、現状では建物として復元はできなかったが、おそらくこの辺りにも、同様の建物が存在したと考えられる。

Fig.16　北建物群（西から）

南建物群は、ほとんどの建物が調査区際で検出されていることもあり、全体規模が不明である。現状では6BLで検出されたSB6201がもっとも規模が大きく、5×1間以上である。柱穴からは、土師器椀がほぼ完形で出土しており、建物に関わる祭祀行為が行なわれたものと考えられる。また、もっと小規模なものはSB1204で、1×1間である。その他のものは2×1間以上である。柱穴の規模は、直径50cm前後、深さは10～50cm、柱間は南北約1.5～2.0m、東西2.0mを測る。建物の方向はほとんどがN30°Wであった。側柱が大半であるが、SB1202やSB6203のように総柱建物も存在する。

Fig.17　SB6201遺物出土状況（南西から）

中央建物群は、南・北の建物群に属さないもので、SB2201は2BL東で検出された2×2間の掘立柱建物である。柱穴掘形は直径40～50cm、

深さ20㎝を測る。埋土は灰褐色砂混じり粘質土ある。柱間は東西で約1.5m、南北で約1.3mを測る。建物の方向はN25°Wである。SB5201は5BL南で検出された3×1間以上の掘立柱建物である。建物は南側の調査区外に延びる。柱穴掘形は直径40㎝前後、深さ15㎝前後を測る。埋土は灰褐色石混じり砂質土である。柱間は東西で約1.7・2.7m、南北で約1.7mを測る。建物の方向はN15°Wである。

竪穴住居

3・6ＢＬで2棟検出した。3BL中央で検出したSX3204は、やや不整形な方形を呈する竪穴住居と考えられる。東辺は約5.0m、西・南・北辺は4.0m、壁高20㎝を測る。SD207・208と切り合っていた。底面は平坦で、周壁溝は確認されなかったが、土坑1基、ピットを数基検出した。埋土は灰褐色粘質土で、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。また、6BL中央で検出したSB6202は、東西辺3.5m、南北辺4.0m、壁高10㎝を測る。床面はほぼ水平で、叩き締めたような痕跡は確認されなかった。4本柱で、炉・カマド・周壁溝は検出されていない。柱穴は直径30～70㎝、深さ20㎝前後を測る。埋土は黒灰色砂質土が主体で、古墳時代の須恵器・土師器と小型の携行用と考えられる小型の砥石が出土した。

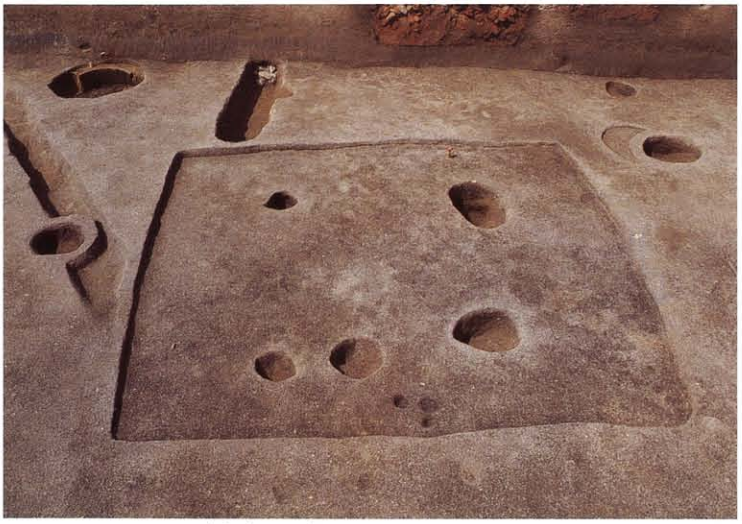


Fig.18　SB6201（南東から）

Fig.19　小型砥石

Fig.20　玉類（包含層他出土分）

溝

調査地全域で検出された。比較的規模の大きいものとしては、1BLSD1203・3BLSD3201・6BLSD6201が挙げられる。SD1203・SD6201はお互いに切り合っており、SD1203のほうが若干新しい時期のものと考えられる。前者は、検出長13.0m、幅70㎝、深さ20㎝前後を測る。北西から南東方向に直線的に延び、南北2地点で古墳時代後期の須恵器坏身・高坏・蓋がまとまって出土した。一方後者は、検出長13.0m、幅1.3m前後、深さ約10㎝を測る。他の溝とは異なり、底面は平坦で、断面形は皿形を呈する。埋土からは人頭大の花崗岩礫や古墳時代後期の土師器・須恵器片が出土したのみであった。SD3201は、先述の2条の溝と異なり、形状が逆L字形を呈する。検出長は東西方向で約20m、南北方向で約7.0m、幅0.6～1.5m、深さ約25㎝を測る。

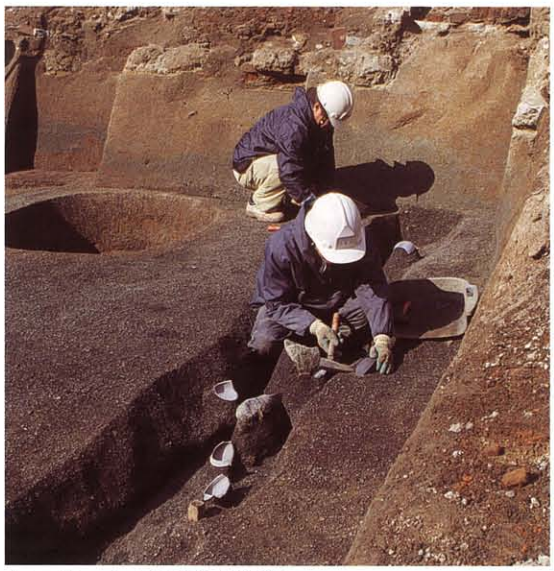


Fig.21　SD1203検出状況

4 BL　弥生時代～古墳時代遺構面（北から）

3 BL　SD3201遺物出土状況（南から）

1 BL　古墳時代遺構面（南から）

3 BL　古墳時代遺構面（西から）

6 BL　古墳時代遺構面（南西から）

Fig. 22　古墳時代後期遺構平面図

2ヶ所で古墳時代の須恵器坏身・蓋、土師器がまとまって出土した。これら3条の溝は、その形状から区画溝のようなものと考えられる。また、1・2BLで検出したSD1201・2101は同一の遺構と考えられ、推定長17.0m、幅1.0m前後、深さ15cm前後を測る。北西から南東方向に直線的に延びる。埋土からは土師器甑・甕、須恵器高坏・坏身などが出土した。

Fig.23　SD1203出土遺物

Fig.24　SD3201出土遺物

弥生時代

主に1BL・4BLで遺構を検出した。主な遺構は竪穴住居・方形周溝墓・土坑・集石・ピットが挙げられる。

竪穴住居

SB4201は4BL南半中央に位置する。直径6.0m、壁高20cmを測る円形の竪穴住居である。中央土坑、周壁溝、ピット8基を検出した。部分的ではあるが、放射状に拡がる炭化材を検出しており、焼失住居であると考えられる。また、周壁溝が南東側で壁面に沿っていないことから、住居を一部拡張した可能性が考えられる。なお、貼床の痕跡は見られなかった。

中央土坑は直径1.2m、深さ30cmを測り、断面は緩やかなU字状を呈する。柱穴は、直径40cm前後、深さ10～15cmを測る。床面北東には弥生時代中期の甕がつぶれた状態で、床面西には1辺30cmほどの台石と考えられる花崗岩の平石も出土した。

Fig.25　SB4201出土遺物

炭化材のサンプル取り上げを実施している。分析の結果、いずれの木材もコナラ属アカガシ属で、強度の強い木材を選択して使用していたことが判明した。

方形周溝墓

ST4301は3BLから4BLにかけて検出された方形周溝墓で、北溝は検出長10.3m、幅2.0m、深さ35cm前後、南溝は検出長8.4m、幅0.6～1.1m、深さ20cm前後、東溝は検出長3.9m、幅0.7～1.3m、深さ20cm前後、西溝は検出長3.0m、幅50cm、深さ20cm前後を測る。周溝の大半は大きく削平を受けていたが、最も残存状況の良好であった北溝では、北側は比較的急に落ち込み、南側では一段テラスを設けてなだらかに上がっていく状況が観察できた。これらの溝に囲まれた墳丘の面積は53㎡である。墳丘は削平されたものと考えられ、主体部は確認されなかった。等高線に沿う形で築かれていた。北溝の両端で壷・水差・甕などの弥生土器が底面でまとまって出土した。

Fig.26　ST4301遺物出土状況（北東から）

出土した土器には他地域の影響と考えられる特徴が見られる。例えば、指かけをもつ水差形土器や、縦位の櫛描直線文を施す算盤形の壷などが挙げられる。他地域の影響とは言えないかも知れないが、この時期の

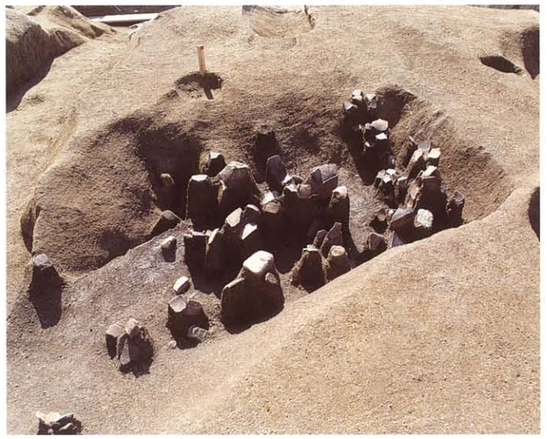
Fig.27　ST4301出土遺物

4 BL　方形周溝墓 ST4301（南西から）

4 BL　縄文時代～弥生時代遺構面（西から）

5 BL　縄文時代遺構面（西から）

2 BL　縄文時代遺構面（北から）　中央に SX2301



2 BL　SX2301遺物出土状況（西から）

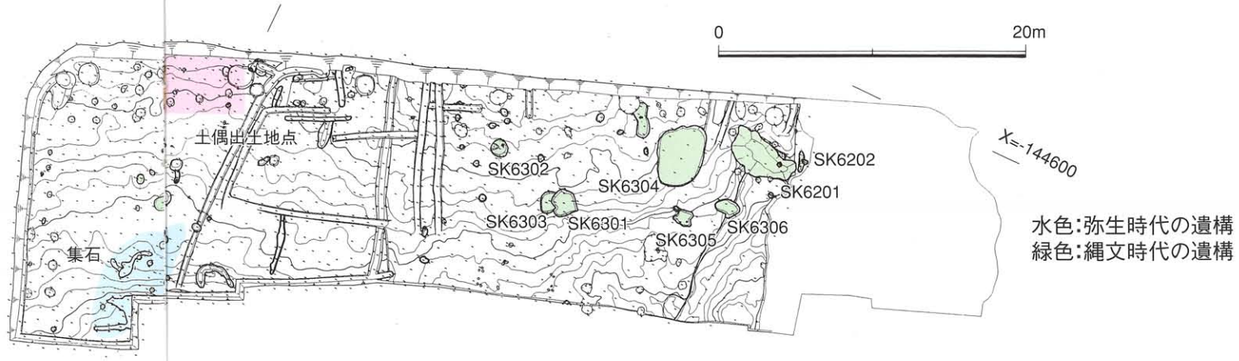


Fig. 28　縄文時代後期から弥生時代遺構平面図

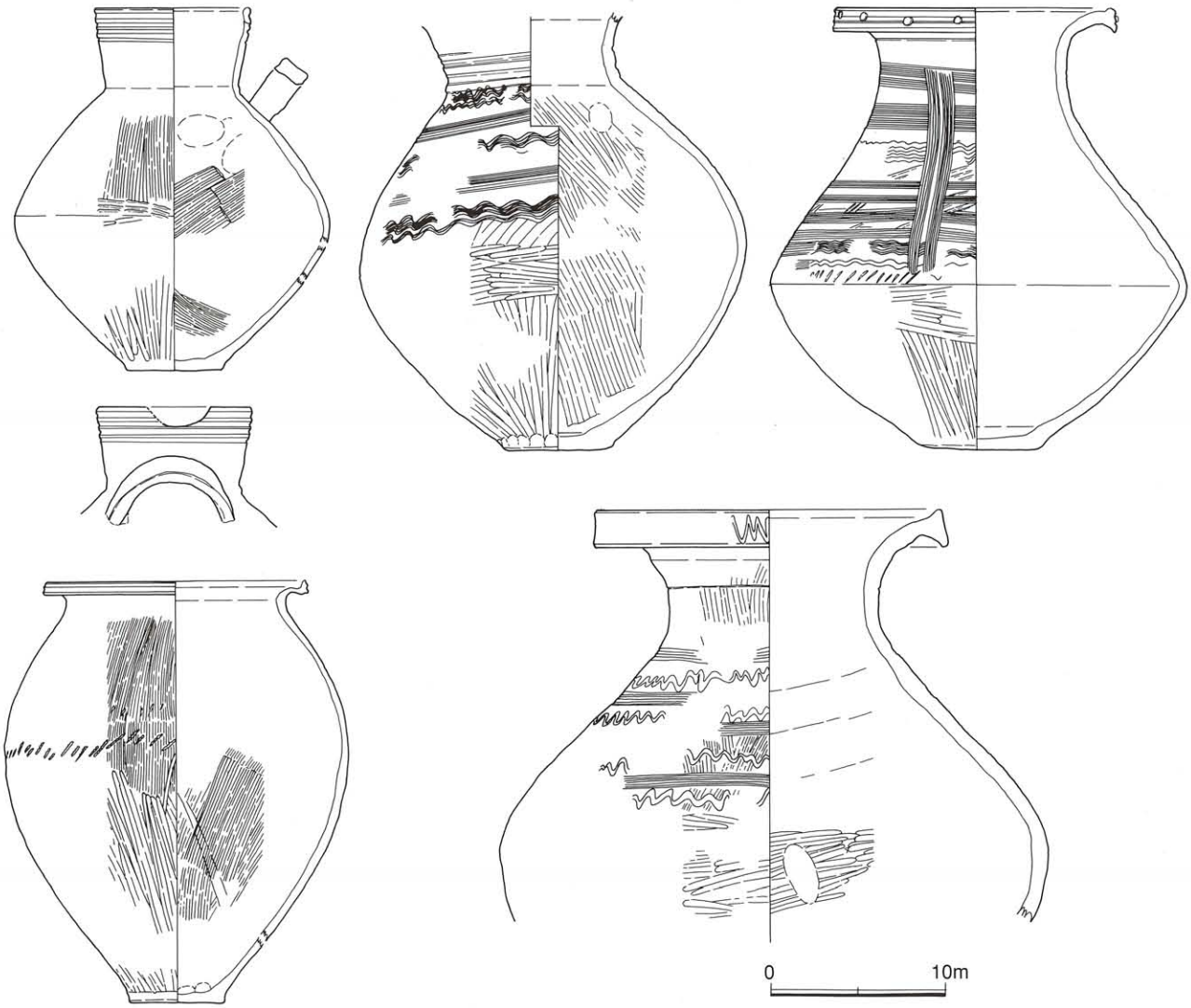


Fig. 29　ST4301出土遺物

土器と比較すると、器壁が厚く重量感のある壷があり特異なものといえる。壷や甕には被熱痕跡があり、特殊な使用状況が予想される。それらことから供献土器と考えられる。

土坑

SK4203は、4 BL 北半で検出した。長径2.2m、短径1.3m、深さ40cmを測る楕円形の土坑である。弥生時代後期の甕が人頭大の礫とともに出土した。

Fig. 30　SK4203（西から）

集石遺構

1BL 西で検出した。南北約7.0m、東西約4.0mの範囲で多量の拳大から人頭大の礫と共に、後期の縄文土器・石鏃、中期の弥生土器、叩き石、石錘、石包丁などが出土した。礫や土器は緩やかに傾斜する地形の上に投棄されるように検出された。礫の堆積は厚みなく、比較的短期間の堆積であったと考えられる。遺構の形態からは縄文の集石遺構のようではあるが、弥生時代中期の土器が多く出土することから、弥生時代のものであると考えられる。

縄文時代

主に1BL・2BL・5BL・6BLで遺構を検出した。主な遺構は竪穴住居状の落ち込み土坑・落ち込み・ピットが挙げられる。

竪穴住居状落ち込み

SX5301は、5BL南部で検出した。南側は調査区外へ拡がる。底面は北から南へ緩やかに傾斜しており、褐灰色石混じり砂質土が堆積していた。南壁面で深さ30㎝を測る。底面では土坑2基、ピット9基を検出した。ピットのうち3基は直径20㎝、深さ10～20㎝を測り、埋土が3基ともに灰褐色砂質土である。この落ち込みからは縄文土器が多く出土しており、遺物包含層と考えるには土器片に摩滅が少なく、破片も大きいことから、住居址である可能性がある。また、土器と共に石鏃なども出土した。この遺構から出土した土器については、沈線から凹線へと変遷をたどれるような資料がまとまって出土しており、このことから縄文時代後期後葉（元住吉山Ⅱ式）の新相と考えられる。

Fig. 31　SX5304（南西から）

SX5304は、5BL東で検出した。南側を撹乱により削平

Fig. 33　縄文時代後期遺構面（下層2）

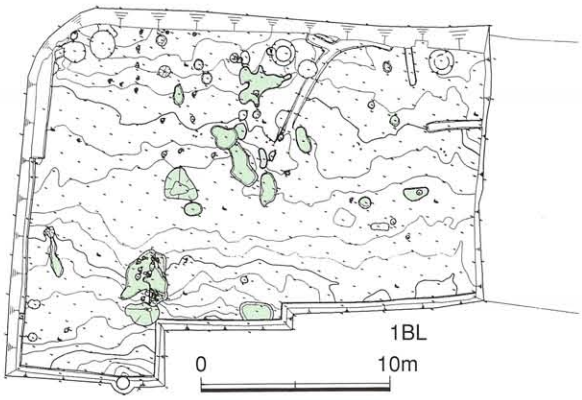


Fig. 32　縄文時代後期遺構面（下層1）

Fig. 34　2BL縄文時代下層1（北から）

Fig. 35　SX5301出土遺物

Fig. 36　注口土器（2 BL　SX2301・5 BL　SX5301）

されていたが、東壁面で深さ20cmを測る。底面は平坦で、直径20～30cm、深さ20cmのピットを5基検出した。埋土は暗灰褐色石混じり粗砂質土、暗灰褐色炭・石混じり粗砂質土、灰青色石混じり粗砂質土で、周壁溝がめぐり、北側の立ちあがりが急であることから、住居の可能性が考えられる。撹乱により不明な箇所が多いが、復元すると直径約10.0mを測る。縄文土器が出土した。

土坑・落ち込み

深さ10㎝程度の浅いものと、50㎝を超える深いものが確認された。浅いものは調査区のほぼ全体で検出された。特に２BL でまとまって検出された。大半は直径2.0m程度の不整形な楕円形を呈する。主なものとしてはSX2201 や SK2204などが挙げられる。前者は、２BL 南西で検出した。南西部分で検出された落ち込みの中で、最も大きい落ち込みである。最大幅2.9m、深さ10㎝を測り、底面には一定せず、落ち込みや、ピットなどが検出された。縄文土器・サヌカイト製石鏃が出土した。出土した縄文土器は、主に平行沈線や、上

Fig. 37　SX2201出土遺物

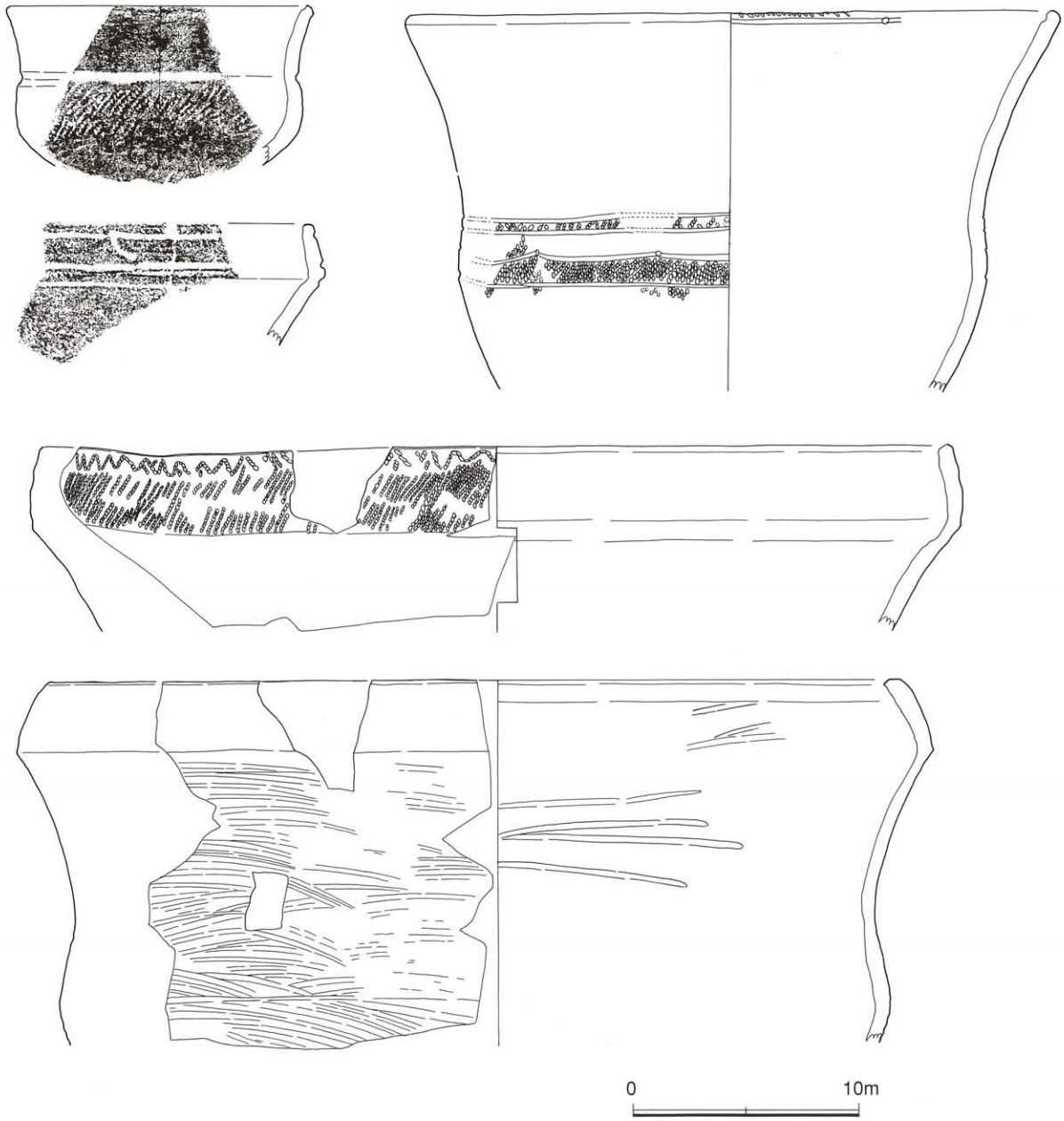


Fig. 38　SX2201出土遺物

弦連弧文などを伴う磨消縄文を施すもので、凹線文を施すものも比較的多く出土した。このことから縄文時代後期後葉（元住吉山Ⅰ～Ⅱ式）のものと考えられる。後者は、2BL南西で検出した。長さ3.3m、幅1.5m前後、深さ0.1～0.3mを測り、2BL南西で検出された落ち込みの中では、もっとも深い。底面に凹みがあり、一定しない。この遺構で出土した土器には口縁部に横位の6字状文を口縁に施すものや、体部にRLの絡げ縄を施すものがあり、縄文時代後期後葉（一乗寺K式）の古相のものと考えられる。

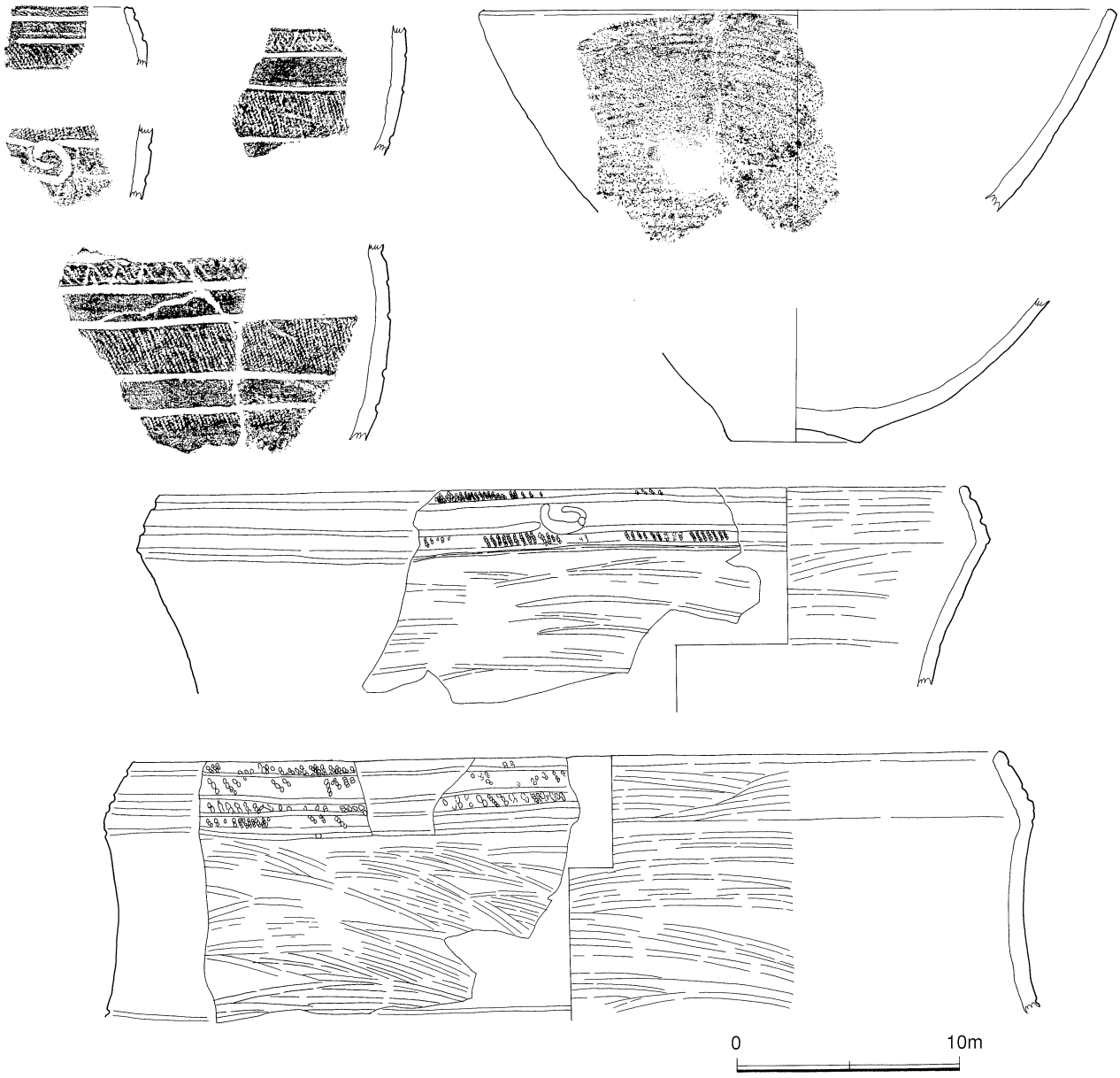


Fig. 39　SK2204出土遺物

一方深いものは、1BLSX1401、2BLSX2301・2302、6BLSX6201などが挙げられる。SX1401は1BL南西で検出された直径約1.8m、深さ70cmの不整形な土坑である。若干北側オーバーハングしており、炭粒が混じった暗オリーブ灰色シルトから砂質シルトが堆積する。縄文土器・石鏃・サヌカイト片が出土した。遺構の形状から貯蔵穴のようなものと考えられるが、堅果類の種子などは出土していない。

SX2301は、2BL中央で検出した。上層は一辺約3.0m、深さ1.4mを測るやや不整形な方形を呈し、さらに北半底面には長辺2.2m、短辺1.7m、深さ70cmを測る不整形な長方形を呈する落ち込みが確認できる。北側と東側が撹乱により削平されていた。下層の長方形状を呈する底面は、北辺では袋状土坑状を呈し、肩は急

にたちあがり、南辺では緩やかなＵ字形を呈する。形状や土器の出土状況から貯蔵穴のようなものではなく、祭祀遺構のようなものと考えられる。埋土からは縄文土器・サヌカイト製石鏃・サヌカイト剥片・日本海側からの搬入品と考えられる珪質頁岩製石鏃・玉髄・骨片等が出土した。縄文土器については、元住吉山Ⅰ式と考えられる深鉢などが出土したが、主体を占めるのは凹線文土器である。扇状圧痕を伴うものも見られるため、縄文時代後期末（宮滝式）のものと考えられる。

Fig. 40
SK2204出土遺物

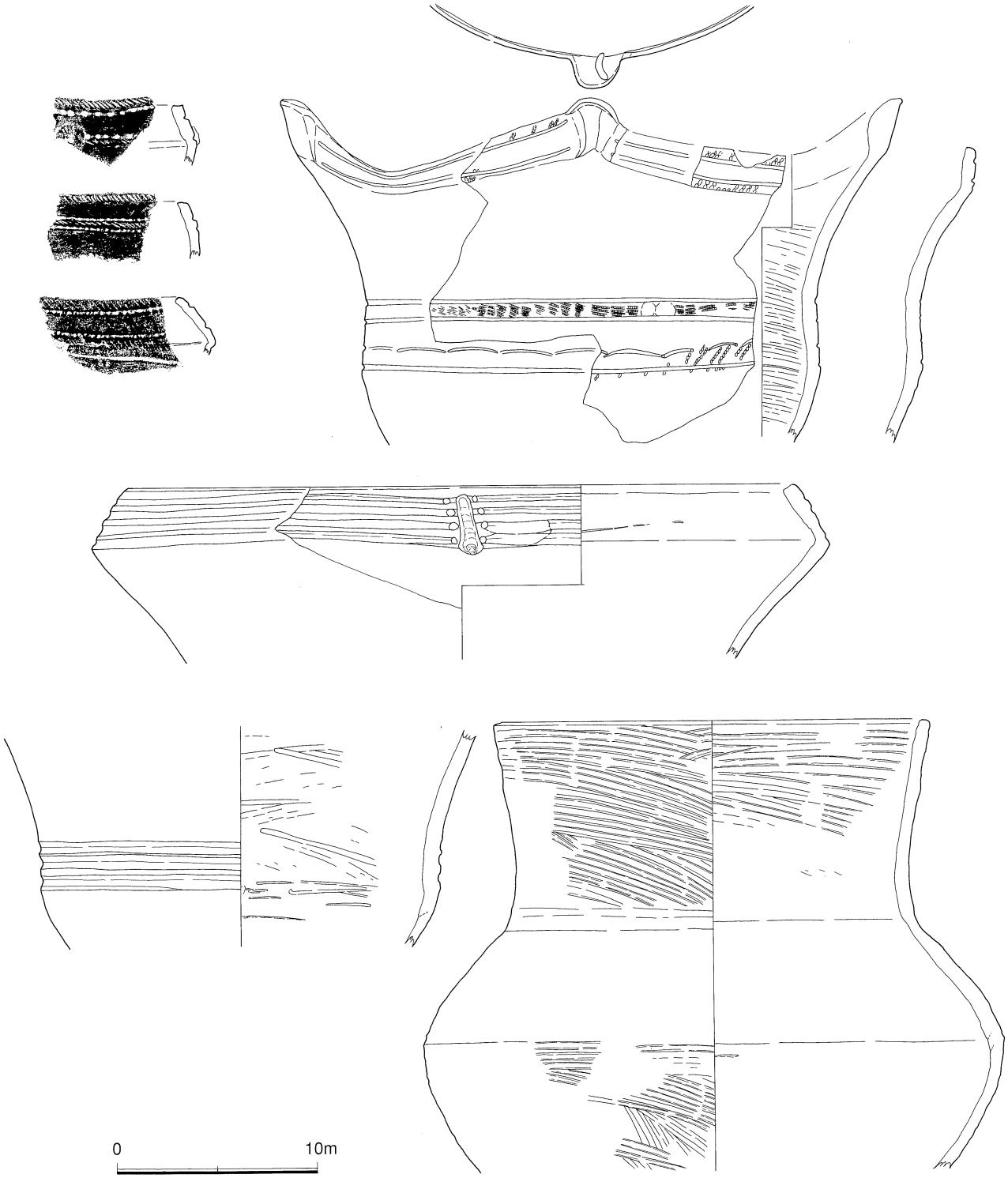


Fig. 41　SX2301出土遺物

左上：中央のやや白いものが珪質頁岩製石鏃
右上：注口土器
中央左：深鉢（元住吉山Ⅰ式）
中央右：深鉢（元住吉山Ⅱ式～宮滝式）
下：凹線文土器（元住吉山Ⅱ式～宮滝式）

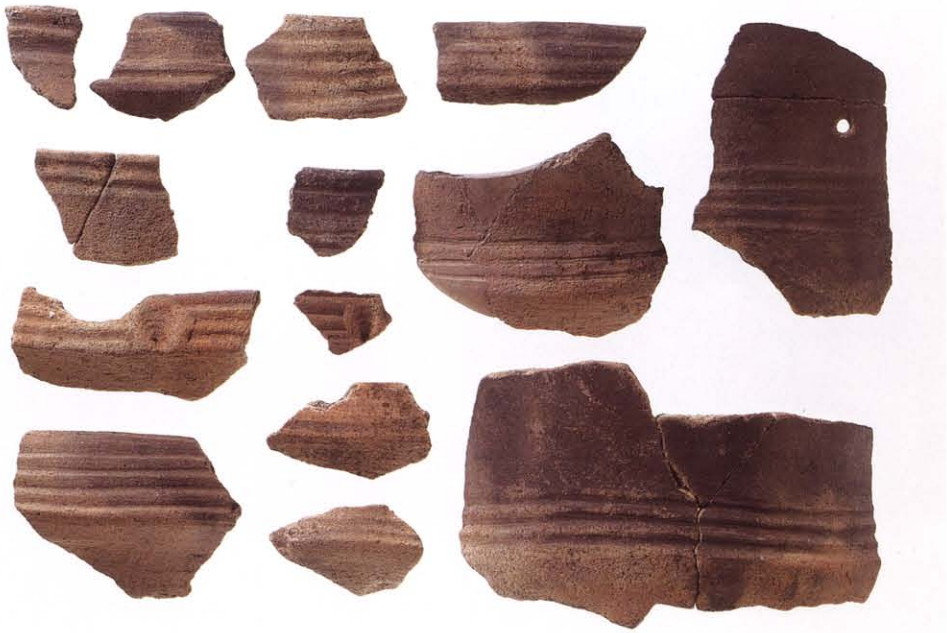


Fig. 42　SX2301出土遺物

SX2302は、2BL東南端で検出した。不整楕円形を呈し、長径2.8m、深さ10cmを測る。縄文土器が出土した。土壌水洗を後日実施しており、サヌカイト製石鏃・サヌカイト剥片・骨片・ヒスイ製の小玉（直径6.88mm、厚さ4.50mm）等が出土した。ヒスイは新潟県糸魚川流域で産出されたものと考えられ、北陸地方からの搬入品と考えられる。

Fig.43　ヒスイ製小玉

SX6201は、6BLで検出した最大長4.3m、最大幅2.5m、深さ1.3mを測る不整形な土坑である。西側・南側の壁面はなだらかで、一方、北側・東側の壁面は比較的急な傾斜を形成する。底面は、中央がもっとも深く、東側に一段高く、テラス状の平坦面を形成する。埋土は大きく2層に分けられる。上層では暗茶灰色系の粘質土が、下層では灰色～灰黄色の粗砂が堆積する。縄文土器・石鏃・サヌカイト片が出土した。遺構の形状からSX2301と同様の性質を持つ遺構であると考えられる。

出土遺物（土偶・石器）

土偶は1BL第4面上層の遺物包含層から出土した。大まかな出土地点は、1BL北半中央である。出土した土偶は右肩部から体部の半分で、肩部最大長7.7cm、腹部幅3.7cm、残存高6.7cm、肩部厚4.0cm、腹部最小厚1.9cm、腹部最大厚3.3cmを測る。正面は大きな剥離痕跡があり、おそらく乳房を表現した突起が剥落したものと考えられる。一方、背面は体部中央にユビオサエにより大きな凹みを作り出す。肩部には頸部に近い部分に2条、肩口から体部にかけて大きく開いたV字状に沈線を2条施す。沈線には密に刺突を施す。さらにその沈線の外側に並行する浅い沈線を施す。胴部は大きく括れていたと考えられる。体部上部の剥離部分を観察すると、粘土板状のものが見られる。そのことから推察すると、土偶を作る際に粘土板を基礎に他の

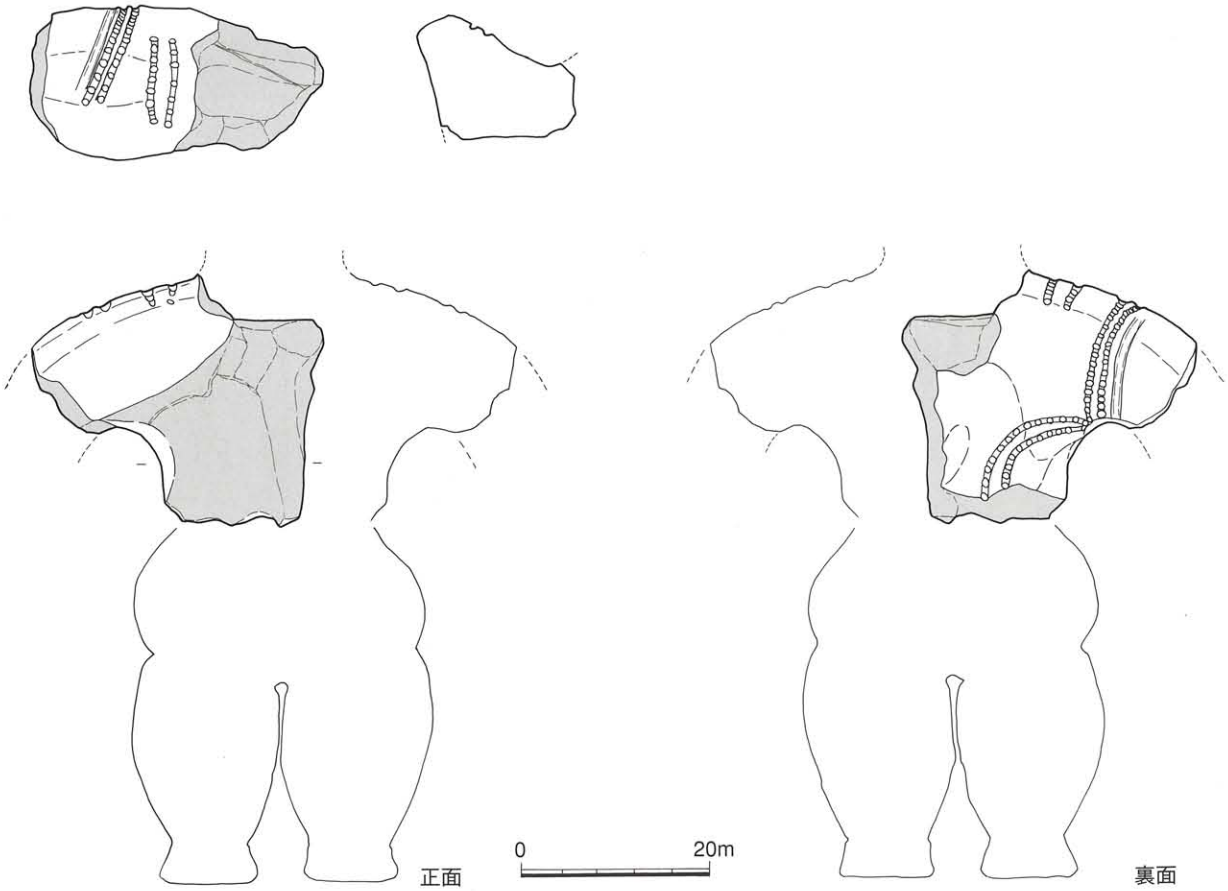


Fig.44　1BL出土土偶復元図（下半身は佃遺跡例を縮小して使用）

部分を貼り付けて、作り上げていったと考えられる。なお、頭部・腕部・脚部はすべて欠損しおり、周辺からも出土していない。同じ土層からは縄文時代後期・弥生時代中期の土器が混在しており、正確な時期は不明であるが、周辺で出土した土器や土偶の形態から縄文時代後期後葉（元住吉山Ⅰ～Ⅱ式）のものと考えられる。なお、類似土偶を参考に復元したところ、推定高は20㎝前後と考えられる。

残存部の形状から、東海地方を中心に分布する「今朝平タイプ」の土偶であると考えられる。「今朝平タイプ」の土偶とは、縄文時代後期中葉～後葉の顔のない伸身像土偶で、正面には乳房状の突起をもち、背面には大きな凹みと文様を施す。また、腕部は逆U字形に作り出されるものである。典型例は三重県天白遺跡などで出土している。兵庫県内では兵庫県佃遺跡から出土した。この土偶の文様構成はほぼ同様のものと考えられるが、背面の襷状の文様が、生田土偶では刺突を伴う沈線を２条施すのに対し、佃土偶は２本の沈線の間を二枚貝腹縁による刻みによって充填しており、細部において異なる点が見られる。又、佃土偶は生田土偶と比較すると、やや大型で、報告書の推定高も27㎝前後と考えられている。

Fig.45　1 BL 出土土偶（上：正面・下：背面）

石器も多数出土しており、石鏃だけでも200点を越える。いずれも凹式のものであるが、細部において異なる点が見られ、５～６種類に分類が可能であると考えられる。使用されている石材はサヌカイトで、肉眼での観察であるが、おそらく金山産のものが主体を占めているものと考えられる。製品とともに、大小の剥片や石核と考えられる大型のサヌカイトも出土しており、生田遺跡で石器生産が行なわれていた可能性が高い。その他楔形石器・石匙・石錐・削器・叩石・凹石・石皿・打ち欠き石錘、磨石などが出土した。

Fig.46　片岩製タタキ石

Fig.47　凹石

Fig.48　石錘

第3章　まとめ

生田遺跡は、これまで見てきたように、縄文時代から中世にかけての一大複合集落といえる様相を持っている。

平安時代から中世

平安時代と考えられる建物や井戸が検出されており、屋敷地の一角を確認したと考えられる。このことからこの時期の中心は調査地北側付近にあったものと考えられる。

また、1・4BLの耕作土・包含層などから鞴羽口の破片が出土した。平成18年3月に、近隣で行なった発掘調査においても、同様の遺物が比較的まとまって出土しており、周辺で鋳造関連の遺構が存在した可能性が高い。

古墳時代

古墳時代は、後期の掘立柱建物が12棟、竪穴住居2棟、柵列2条他多数の溝・土坑・ピットが検出された。北建物群は、掘形直径・1辺が50㎝を超えるものである。総柱建物で、逆L字型に整然と配置され、倉庫群のような様相を見せる。一方、南建物群は、建物が逆凹字型に配置され、これら建物に囲まれた場所には、ほとんど遺構が検出されておらず、広場状を呈する。また、建物は北側と異なり、柱穴も50㎝を下回り、総柱建物は少なく、側柱だけのものが多い。北側を倉庫とするならば、南側は居住用の建物と推定される。いずれの建物群もL字またはコ字形の建物配置になっており、建築する際に何らかの規格に基づいて作られたものと考えられる。このような規格性を持った建物配置は、古墳時代の豪族居館や古代の官衙関連遺跡との共通性を見出せる。

弥生時代

弥生時代は円形竪穴住居と方形周溝墓などが検出された。時期的にはやや住居跡が古く中期中葉で、方形周溝墓が中期後葉に属するものと考えられる。住居と墓が近接していることもあり、同時並存はしていなかったものと推測される。方形周溝墓から出土した土器は、他地域の影響と思われる要素を持つ。墓に供献するに際して、非在地系とも言うべき土器が選択されたものと考えられる。また、体部に被熱痕跡がみられるものがあり、祭祀の際に火を使用したものと考えられる。方形周溝墓が検出されている遺跡は雲井遺跡、楠・荒田町遺跡などがある。

縄文時代

縄文時代は、中期（船元式）～後期末（宮滝式）までの遺物が出土した。その数28ℓ入りコンテナにして50箱を越える。2BLは一乗寺K式～宮滝式、5BLは元住吉山Ⅱ式を主体としている。これらの縄文土器は、縄文時代後期の編年研究上重要な資料といえる。また、焼成前穿孔がなされた浅鉢形土器が数点出土した。佃遺跡では水銀朱など赤色顔料の精製を行なった可能性を指摘されているが、赤色顔料の付着は肉眼観察上では見られなかったため、本遺跡の資料では断定は難しい。

また、特殊な遺物としては、土偶・ヒスイ製小玉が挙げられる。特に土偶は、先述の通り東海地方に分布の中心を持つ「今朝平タイプ」と呼ばれる後期土偶の典型的な形態である。このような土偶は兵庫県下では淡路島の佃遺跡で出土しているのみである。兵庫県内でも縄文時代後期の遺跡が確認されているが、土偶が出土した遺跡はまれであり、このことからも、生田遺跡が当時の中心的集落であったことを示している。

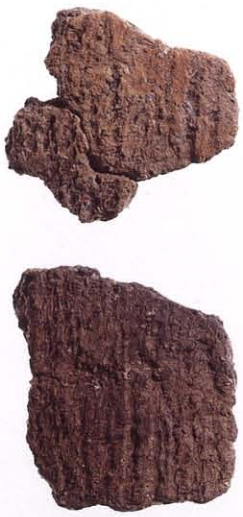


Fig. 49　縄文土器（船元式）

なお、現在整理途中の段階にあり、検出遺構については主要な遺構のみ記載した。今後遺物・遺構の検証を進め、詳細が判明すると考えられる。別の機会に改めて報告したい。

Fig. 50　現地説明会風景

抄　録

ふりがな	いくたいせきだい4じはっくつちょうさがいよう
書名	生田遺跡第4次発掘調査概要
副書名	中山手地区再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集著者名	中谷正
編者機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号
発行年	西暦2006年9月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
生田遺跡（いくたいせき）	兵庫県神戸市（ひょうごけんこうべし） 中央区（ちゅうおうく） 中山手通3丁目（なかやまてどおり3ちょうめ） 下山手通3丁目（しもやまてどおり3ちょうめ）	28103	03-37	34度 41分 37秒	135度 11分 26秒	20051226 ～ 20060331	4,515 （延9,215）	中山手地区 再開発事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
生田遺跡	集落跡	縄文時代中期～近代	近代：中華同文学校レンガ基礎 中世：大溝・土坑・井戸・柵列・井戸 奈良～平安時代：掘立柱建物・井戸・土坑 古墳時代：掘立柱建物・竪穴住居・溝・土坑 弥生時代：竪穴住居・方形周溝墓 縄文時代：住居址状落ち込み・土坑・落ち込み	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・陶磁器・石器（石鏃・楔形石器・石匙・石錘・凹石・磨石・石皿・タタキ石・砥石・台石）玉類（ヒスイ製小玉・滑石製臼玉・蛇紋岩製臼玉）・土玉・土偶	縄文時代後期中葉から後葉の大量の土器・ヒスイ製小玉・縄文時代後期の精製土偶（今朝平タイプ）

表　紙：南から３BL・六甲山系を望む
裏表紙：２BL　SX2201縄文土器出土状況と 縄文土器

生田遺跡第４次発掘調査概要

2006・９・30

発行　神戸市教育委員会文化財課
兵庫県神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL 078-322-6480

印刷　デジタルグラフィック株式会社
兵庫県神戸市中央区弁天町１丁目１番
TEL 078-371-7000

神戸市広報印刷物登録・平成18年度　第216号（広報印刷物規格　A-６類）